

会津に名を残す長崎の豪商・足立仁十郎を追って

平野 恵子

会津若松市に「かすてあん会津葵」というお菓子があつた。長崎のカステラとは違った風味のあるカステラ生地、上品な晒し餡が入り、表面には藩公の文庫印「会津秘府」が刻印されている。このお菓子の葉に驚くことが書かれていた。その部分を抜粋する。

…前略…ではどうして長崎から、はるか離れた山国会津に数多くの南蛮文化がもたらされたのでしょうか。それには二つの大きな潮流が考えられています。一つはレオという洗礼名を持つ隠れもなきキリシタン大名蒲生氏郷、他の一つは長崎にあつて会津人參の貿易を一手に引き受けていた豪商足立仁十郎であります。仁十郎は二年に一度会津を訪れて南蛮文化をもたらししました。…後略

会津には、戊辰戦争の象徴として『泣血氈』（ぎゅうけつせん）という赤い布キレがある。会津戦争終結時に藩主松平容保公がその上に立つて降伏謝罪をしたという緋毛氈を忠臣たちが「この日を忘れないように」と切り分けたものである。そしてこの緋毛氈は長崎の人足立仁十郎が会津公に献上したものと



足立仁十郎の肖像画
(兵庫県朝来市・玉林寺附属)

津公に献上したものと
と言われている。
また、会津の民芸品「会津唐人風」のもともなる唐人風を伝えたのも仁十郎だといひ伝えもある。
『慶応年間会津藩士名録』によると仁十郎は足立監物という名

当時、海防警備役などで、財政破綻寸前だった会津藩にとって、和人参輸出の収益や仁十郎の三万両を超える献金は大きな支えになっていた。それに報いるように会津藩も仁十郎を手厚く遇している。

仁十郎の菩提寺である兵庫県山本町与布土の玉林寺に仁十郎の肖像画があると聞き、ご住職にお願ひし写真をいただいた。仁十郎六十六歳の時の姿らしい。袴の紋は足立家の家紋だが、着物の袖に葵の紋が入っている。着物は会津公から拝領したものだろう。会津藩の仁十郎に対する感謝の気持ちがかげえる。幕末になると仁十郎は会津藩の武器購入にも関わつたらしくドイツ人武器商人カール・レーマン等について書かれた『近代日独交渉史研究序説』（荒木康彦著）の中にその名が出てきた。

戊辰戦争後は、朝敵にされた会津藩の御用達に対する風当たりは厳しく、慶応四年（一八六八）三月、新政府が設立した長崎裁判所の参謀となつた長州藩士井上聞多は、強制的に足立家の輸出用和人参を没収した。その結果足立家は家屋・家財一切を手放さざるを得なくなり、急速に没落していったようだ。

そのような逼迫した状態にあつても足立家は、旧会津藩士子弟の九州留学の身元引受人をするなど、会津藩との関係に筋をとおしている。足立仁十郎とその一族はビジネスでは失敗者だろうが人間的なまっとうさを感じさせる。

その足立仁十郎と家族の墓所が崇福寺裏山の墓地にある。お寺側の話では、すでに長崎での血縁は途絶えているらしく、お参りの人もほとんどないと言ふ。仁十郎とその妻の墓石には「崇福外護」と刻まれている。この墓は長崎に残る数少ない足立仁十郎の足跡だ。

この正月四日、崇福寺の足立家の墓所を訪ねた。墓石の中に長崎の国学者で長崎市史の編纂に参加した半顔足立正枝（大正十年没）の名も刻まれていた。先日、足立家の墓域を訪ねたら、それぞれの墓石の前に小菊が供えられていた。誰がお参りしたのであろうか。子孫の方がいらつしやるのだろうか。仁十郎への興味がますます膨らんでくる。

(全国歴史研究会会員、ITコンサルタント)

で、七百石・御聞番勤肥前長崎表住居の御側衆という高待遇で会津藩士に取り立てられている。

幕末の会津の歴史には必ず顔をだす長崎の豪商・足立仁十郎ではあるが、地元長崎の郷土史関係の書籍には、その名前すら載っていないし、仁十郎の足跡は何故か長崎では、ぶつたりと消えてしまつてゐる。

昨年夏、長崎県立図書館で『足立仁十郎伝』（藤本勉著）という十三ページほどの私家版を見つけた。しかしその中にも長崎での足跡は記録されていなかった。

偶然にもその日、県立図書館副館長の本馬貞夫氏から、昭和五十九年発行の『長崎談叢六十九号』に本馬氏ご自身が足立仁十郎について書かれたとの情報をいただいた。タイトルは『会津藩御用達足立家について―幕末長崎の人参貿易商―』。本馬氏は、県立図書館蔵（当時）の「明治九年庶務課庶務係事務簿―足立程十郎人参販売一件書類」という史料に出会つたのをきっかけに、会津藩和人参貿易を長崎会所が引き受けたいきさつ、幕末期の和人参貿易の実態、足立仁十郎とその周辺、養子足立程十郎による没収人参返却の訴えとその決着などを調べ、覚書としてまとめられている。

本馬氏の覚書によれば、会津藩が足立仁十郎を通して和人参（薬用人参、俗にいう朝鮮人参）の輸出をはじめたのは天保元年（一八三〇）。文政十二年（一八二九）幕府は正式に長崎会所を介して清国への輸出を許可している。足立家は屋号を『田辺屋』といい、現在の浜屋アパート周辺に六百坪以上の敷地をかまえた薬種問屋だった。

足立仁十郎は、享和元年（一八〇一）但馬ノ国与布土村森（兵庫県朝来市山本町与布土）の郷土の家に生まれている。若い頃大阪の薬種問屋『田辺屋』（田辺製菓の前身）に奉公し、その間会津和人参の業務に携わり、やがて「のれんわけ」のかたちで長崎に会津人参御用達『田辺屋』を開いたようだ。

風信

○今年には年あけ早々より、ニュースで不法建造物やライブドアの事など、嫌な事が多く耳に入ってくる。先日、易学の人が私に「今年には丙戌（ヒノエ・イヌ）の年であり、良い年ではない」ので注意しなさいと言われた事を思い出している。

○然し、この事件は二月四日の立春前の事である。ここで私達は気を取りなおし（白浪五人男の）濡れ手に粟の五十両、こいつあー春から縁起がエーわい、と道ゆきしたいものだと考えている。

○長崎の代表的古建築の一つで県文化財に指定されている長崎山清水寺（八坂町）の本堂が、寛永四年（一八二七）の重建以来はじめての解体修理が実施される事になり、各方面より注目をあびている。本堂の建立には何高財が協力しており、其の碑文が独立禅師の撰文で本堂の裏にある。昔より「この碑文を撫で本尊を拝すると無病安産なり」と伝えられている。本会でも三月中旬に、解体前に市文化財課に御指導いただき説明会を開催する計画を立てている。御参加をお待ちしている。

○長崎でも来る三月五日、他県同様（長崎）「歴史文化観光検定」試験が実施されることになった。そのテキスト・ブックも市内各書店で発売され、試験場は長崎大学文芸キャンパスとあつた。

○昭和五十七年発足した「長崎歴史文化協会」の平成十七年度の総合編集「特集・ながさきの空 第十七集」が一月末発刊された。御希望の方は本会事務局、または十八銀行本・支店にてお受け取り下さい。

(無料)

○明坂英二先生より、斎藤芽生画伯の美しい絵入りのユニークで美しい（月刊）「たぐさんのふしぎ…カステラ」を戴いた。まあ一度、手にとつて御覧になつてみませんか。（福音館書店刊・七〇〇円）

○天草本渡市在住の地方史研究家鶴田文史先生より「天草陶磁焼の歴史研究」を戴いた。天草の陶土は昔より伊万里、有田、亀山（長崎）等の原材料として使用されており、陶磁器を研究される方々は是非座右に置かねばならぬ一冊であろうと考えている。（天草民報社刊・二、〇〇〇円）

